



菅原
田白女

三十七編上

~13
3013
37





初午の鱸魚鯛成えと節分の赤鯛鮮をゆき吹草祭平ふ
 乳柑子と投る例の絶てるれば蜜柑の我の顔小誇り長草の口田
 類の時と節と自然お得る勢ひを常の位おかきこれをお思ふ大晦の
 白酒一枚繪草さじと呼の吹草を心も春めく其をりふこそ拙作を見
 近年彫る揃へ兼さく頃から春の新板をられ又かれをり。様散
 ても賣出さ。さるまじふ奥もる長拍語れぬ繪草紙かきませ時節とさ
 多し二月の菰笠遊賣の八更ふる。作者も七月毛壇の色揚の請りて
 頼人のるやうふやうるる即分との赤鯛齒さる嘴でも田作よふあよ
 なる産物とるるべー

柳亭種彦記



松原
けいさく
松や
あま
らん



3013
37

冷泉院
足利義植公

あまの
きさね
あまの
らん

あまの
らん

源氏廿七篇

つぎは
かへりの
あつた
まも

あつた
まも
あつた
まも
あつた
まも



あつた
まも
あつた
まも
あつた
まも

あつた
まも
あつた
まも
あつた
まも

あつた
まも
あつた
まも
あつた
まも



あつた
まも
あつた
まも
あつた
まも

源氏廿七篇

